

館山支部だより Vol.124

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



《秋を彩るサザンカ》
ツバキ科の常緑樹、晩秋には休眠に入り翌春に再び新芽を出し始める。
《拙宅の庭先から》

元日に能登地方で発生した大地震で災害派遣要請を受けた自衛隊部隊が現地で捜索、救出、生活支援等々献身的な活動を行ってきましたが、9月2日の撤収まで派遣隊員延べ114万人、派遣期間244日という自然災害派遣としては過去最長を記録したと報告されております。そしてまだ復興が思うように進まぬ矢先の今月21日には、記録的な集中豪雨という二重の大災害に見舞われております。

要請により再び災害派遣出動に応じた自衛隊部隊の現地での懸命な捜索や救出活動の様子が報道されておりますが、一日も早い行方不明者の発見、救出と現地の復興を祈念するとともに 派遣部隊隊員の健闘に力強いエールを送って止みません
＜川村 記＞

支部の活動概要

《10・11月の活動予定》

- 10.10(木) 館砲校予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 10.20(日) 館山航空基地開隊71周年記念行事
- 10.24(木) 定年退職予定隊員に対する隊友会説明会
- 11月(未定) 館山航空基地殉職隊員追悼式 (館山基地)
- 11..30(土) 11月支部役員会(コミセン)

《8・9月の活動実績》

- 8.10(土) 県隊友会前期理事役・支部長会議 (千葉市民会館)
- 9..28(土) 9月支部役員会(別法、コミセン)

隊友会の事業活動理解の一助として

”隊友会って何をやる会(団体)なの？、よく(さっぱり)分からない”といった声を耳にすることがあります。隊友会が目指し、取り組み、実践している事業活動は隊友会定款に挙げられておりますが、毎月刊行される機関紙「隊友」から隊友会活動の一端を手っ取り早く知ることができるのではないのでしょうか。

隊友会掲げる事業活動の「4本の柱」として、

- ・防衛・防災及び自衛隊諸業務に対する協力、地域社会に対する貢献
- ・安全保障、防衛に関する調査研究、政策への提言、隊友紙機関紙(主として隊友会本部の所掌)
- ・殉職自衛隊員、戦没者の慰霊顕彰
- ・その他の各種事業

が掲げられておりますが、四つ目の各種事業が主として隊友会の会員が享受できる事業活動と言っても良いでしょう。団体生命・障害保険、医療保険、医療互助制度から各種儀式サービス、スポーツクラブ等の優待利用等々、有利な福利厚生サービスの利用が可能です。これについては、「隊友会事業の紹介」として毎年5月号の「隊友」紙にカラー刷りの保存版として掲載されておりますので大いに活用して下さい。

＜支部事務局＞

雑想「紙が作られる工程を実地に検分？して」

かなり古い話ですが海自定年後10年近く損保会社に勤めていたことがあります。与えられた仕事は、顧客の企業・工場等のリスクマネジメントと言いますか、顧客に安全管理面での改善提案をする仕事でした。企業・工場と言っても造船所、機械・部品製作工場、製薬会社等々職種、規模の大小等々あり、また調査者自身経験はもとより専門的な知識も皆無の状態だったことは言うまでもありません。

勤務を終えて特に印象深かったと言うよりは苦労したのは、北海道苫小牧にある日本最大と言われる製紙工場のリスク調査を数回担当したことです。何しろ広大な敷地、無数の工場棟に加えて専用の山林を持っているのです。紙の原料となるパルプを自前で確保するためにも、植樹から育樹、伐採、そして工場までの運搬は専用の軽便鉄道や水路で行い、さらには工場稼働用電力確保のため、山に専用の水力発電所が設けられているのです。

調査は大抵の工場の場合1～2日程度で終わるのですが、この製紙工場の場合は朝から夕まで、フルに1週間の日程で行われるのです。各所を歩き回る作業は、50代の後半から60代の前半を迎えた身には結構しんどかったのです。それ以上に製紙業という初めての分野に足を踏み入れることになった方がむしろ重圧になったと思うのですが、数回のリスク調査において、製紙プロセスの最初の段階、パルプ原料の粉碎工程の中で生起する可能性のある粉塵爆発や最終的な段階の製紙ロール(幅約3m、直径2m、紙の長さ数百m)の高速巻き取り工程中の切断という、過去に発生したことのある致命的な事故の防止については、特に念入りな調査に心がけた積りです。

話は逸れますが、高校では苦手の音楽に代えて習字(書道)を選択したのですが、下書きはすべて準備した古新聞紙で白紙を使うことは先生に提出する清書ぐらいだったと思います。それだけ白紙は貴重、希少だったのです。

現在、世界的なパルプ原料の不足から新聞とか雑誌の古紙の再生が叫ばれておりますが、古紙の再生には実に多くの設備と処理工程が必要なのです。

紹介した製紙工場でも古紙の再生に多くの設備・工程が設けられております。古紙の脱墨、脱硫等の幾つかの化学薬品を用いる工程を踏んで最後は処理水の放流ということになります。放流直前の処理水池には沢山の鯉が飼われ、最終工程のチェックという大切な役割を担っているとか。

それにしても現代の膨大な紙の使用量とともに大型店舗の商品棚には沢山の用紙バックが並べられ、しかも比較的安価で紙に事欠くことはありません。私に言わせれば贅沢過ぎると思うのです。

”限りある地球資源”紙をもっと大切に使うではありませんか。

《匿名会員、海》

海軍礼式関連「陸上部隊(基地)で軍艦旗を掲揚」

かつての帝国海軍では軍艦の旗章として、明治22年にそれまでの旭日旗(日の丸)に代えて「軍艦旗」を制定した。

この軍艦旗が海上自衛隊でも自衛艦旗として引き継がれている。

左の写真①は、かつての洲ノ崎海軍航空隊(「洲ノ空」)の国旗掲揚の一コマであるが、よく見ると掲揚されているのは旭日旗ではなくて軍艦旗である。旧海軍においては(海自の場合と同様)、通常は基地(陸上部隊・機関等)では国旗(旭日旗、日の丸)を掲揚するのが習わしであるが、海軍の旗章条例には次のような特例が設けられていた。

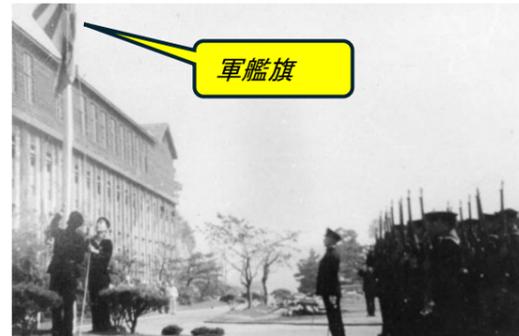
- 紀元節、天長節、新嘗祭などの四大節(国家の祝日)
- 基地・部隊の開隊記念日
- 部隊指揮官の交代行事 ほか

には旭日旗に代えて軍艦旗を掲揚することができるようになっている。しかしながら掲揚するためには海軍大臣の許可が必要なのである。その都度(期間的な余裕をもって)横須賀鎮守府司令長官経由(横須賀鎮守府所属部隊の場合)で海軍大臣宛に認可の申請を提出しなければならない。所要の条件が整っていると認められた場合には、横須賀鎮守府参謀総長から「上申の件、掲揚差し支えなし」といった回答が出るのが習わしであった。写真①の洲ノ空の軍艦旗の掲揚が何の日か特定はできないが、上記の記念日のいずれかであったことは間違いない。

<追 記>礼式とは関係ないが、旧軍関係の写真から撮影時期等を特定あるいは推定する上での参考事例として若干解説しておきたい。左の写真②は、野外演習のため隊伍を組んで洲ノ空正門(現在の海技学校正門付近)を出発する兵器整備予備学生の一団である。ここで写真①、②の中の人物(掲揚する儀仗隊員、正門の衛兵)の服装がいずれも濃紺の海軍の第一種軍装であり、また隊伍を組んで行進する予備学生が白作業服を着用していることに着目してもらいたい。戦局の推移等に鑑み、海軍は19. 8一斉に隊員の服装を改正した。海軍大臣から上下級士官、下士官・兵卒に至るまで季節、勤務場所等を問わず、全員が同じ褐青色、背広開襟型、略帽の「第3種軍装」に統一した。異なるのは階級章(襟章)と帽章だけだった。以降終戦まで海軍本来の濃紺(冬)・白(夏)制服を着用する機会は二度と無かった。このことから写真①、②の撮影時期は、S18年秋からS19年の春までに絞込むことができる。(洲ノ空開隊はS18. 6)蛇足ながら、戦後製作されたドラマなどで、20年5月ごろ出撃直前の戦艦大和乗組を発令された練習隊卒の水兵さんの一団が白の長袖制服を着用して乗組むシーンがあったが明らかに時代考証の欠如によるものであろう。

<注>写真①、②は、洲ノ空第7期兵器整備予備学生課程を修了して終戦まで教官を勤めた館山在住のW氏(故人)のアルバムから

《地域史探索マニア その48》



写真①洲ノ空本部庁舎前での軍艦旗の掲揚
現在の笠名区市営住宅付近



写真②野外演習のため洲ノ空正門を出発する予備学生の隊列
右は正門門柱の表札、後方に見える小山(右側)は天神山

